



ご案内

◆CIEC 第 92 回研究会

テーマ：社会へつなげる学び ～問い直そうキャリア教育～

日時：2011年10月16日(日) 13:30～16:30

会場：京都女子中学校・高等学校(京都府東山区熊野北日吉町17)

◆外国語教育研究部会第5回学習会

テーマ：タブレットPC時代の外国語教育

日時：2011年10月22日(土) 13:00～16:00

会場：大学生協会館地下会議室(東京都杉並区和田3-30-22)

◆PCカンファレンス北海道2011

テーマ：新しい教育のデザイン ～北海道での実践例から～

日時：2011年11月5日(土) - 6日(日)

会場：札幌国際大学(札幌市清田区清田4条1丁目4番1号)

分科会論文のご応募をお待ちしております。

◆CIEC 春季研究会 2012 論文募集

論文投稿期間は11月1日(火)～12月1日(木)

CONTENTS

- | | | | |
|---|--------------------|---|--------------|
| 1 | CIEC 研究会報告 | 2 | CIEC からのお知らせ |
| | CIEC 春季研究会 2011 報告 | 3 | CIEC 活動日誌 |
| | 第90回研究会報告 | | |
| | 第91回研究会報告 | | |

会員状況

◆ 個人会員 ◆

教員	645	大学職員	17
院生	63	学生	9
生協職員	69	企業	30
研究員	7	その他	49

◆ 団体会員 ◆

企業	30	生協	56
大学	1	高校	2
法人	3		

(2011年9月10日現在)

研究会報告

【CIEC 春季研究会 2011 報告】

日時：2011年3月26日（日）13:00～17:15
会場：大学生協杉並会館（東京都杉並区和田3-30-22）
参加者：35名

昨年に引き続き、研究会企画として、「CIEC 春季研究会 2011」を3月26日（土）に大学生協杉並会館において行った。今回の研究会は、昨年と比較して、午前中の部にワークショップなどの企画を行うことができなかつたため、参加者が少ないことは、予想されていたが、何よりも、3月11日（金）に東北地方太平洋沖地震によってもたらされた東日本大震災やその後に発生した原子力発電所の事故等により、その開催が非常に困難なものであった。地震発生直後から、各メディアは、特別番組にその編成を変更し報道を行っていたが、非常に広い範囲の被害がもたらされたため、取材も非常に困難なものであったことは容易に想像できる。電話はもちろん携帯のメールさえもつながらない状況であったが、比較的正確でリアルタイムに情報を発信できたのは、Twitterであったかもしれない。ここにもネットワークメディア活用の重要性が認められる。

研究委員会では、被災された方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、当時、あらゆる場面で自粛が叫ばれ、様々な催しや企画などが次々と中止されている中において、我々にできることを行うとの姿勢で、次のようなメッセージを発信し、3月26日の「CIEC 春季研究会 2011」で発表される意志のある研究者がいる限りその会場を準備し、いつでも研究報告が行えるような体制をとった。

今回、この報告を記述するにあたって、改めて考えてみると、非常に困難な中の判断であったと思える。東北地方太平洋沖地震より3日後には、突然の事態により、開催直前・開催中に中止・中断せざるをえない可能性は否定できないという条件付きではあるが、研究委員会では、研究会を行う方向で意見がまとまった。我々がこのような体制をとることができたのも、会長、副会長をはじめとするCIECという運営組織の信念のある考え方、CIEC事務局の支援、そして、研究委員会の各メンバーが様々な情報を収集し、それらを冷静に的確に判断できたことにあると考えている。

発信したメッセージは、「CIEC 会長、副会長からの「東北地方太平洋沖地震お見舞い」メッセージにも書かれておりますが、ネットワークメディア活用による情報対応能力が極めて重要であることは明らかであり、情報弱者への対応も大きな問題になっております。ネットワークメディア活用による情報対応能力が極めて重要であることは明らかであり、情報弱者への対応も大きな問題になっております。このような緊急事態だからこそ、教育と学びにおけるコンピュータおよびネットワークの利用のあり方等に関する研究成果に、数多くの課題があることに「気づき」、そこから何を「学び」、そして何を「考え」「行動」すべきかを議論できるかもしれません。我々にできることは、教育・研究者として、いかなる事態でも、教育や研究を継続し、比較的被害の少なかった東京で予定されていた平常の活動や研究会を粛々と進めることも重要であると考えます。東日本大震災以降、このような研究会などは、中止が当然という流れで、全国的に様々な学会

や研究会などが次々と中止されていますが、教育・研究活動に支障が生じていることについて懸念を表明している発表者や参加者が複数いますし、逆にこのような事態であるからこそ、教育や研究に関わる者が集まる必要があると考える発表者や参加者がいることも事実です。」である。また、発表・参加については、各個人それぞれの考えや立場、周囲の環境などを考慮し、くれぐれも無理のない範囲で参加いただくこととした。



今回の研究会は、A会場とB会場の2つの会場で行った。なお、それぞれの会場において発表された論文は以下のとおりである。

A会場において発表された論文は、

- ICTを活用した小学校英語活動における知覚学習の効果の検討 - 英語の文字・音韻・シラブルの知覚学習に焦点を当てて - 大阪教育大学 生馬裕子 / 京都精華大学 平井愛 / 大阪教育大学 加賀田哲也・吉田晴世
- 多言語eラーニングの実践と普及 - 複言語能力の育成 - (財)日本私学教育研究所 山崎吉朗
- 言語構造式作図ソフトウェア「LangDraw」の開発とその活用 - スマートデバイス向け英文法学習コンテンツ作成を例に - 立命館大学 木村修平
- タブレットPCを用いた韓国語電子教科書の試作および評価 東北学院大学 鈴木康洋・金義鎮・金惠鎮
- 更なる携帯電話機の活用による韓国語学習の拡大へ - ハングル検定5級試験対策用の学習アプリ - 東北学院大学 金義鎮・金惠鎮
- iPhone SDKを用いた中国語音声教材の開発続報 長崎外国語大学 三枝裕美
- Perspectives of Adaptive English Learning on College Level Using “Trinitized” Teaching Materials 北九州市立大学 上村隆一
- Podcastによる電子書籍(PDF・EPUB)の配信 大阪府立大学 清原文代
- 色彩感覚育成ソフトの開発 - 色彩の気持ちが分かります - 埼玉大学 内田裕子 / 大分大学 大岩幸太郎
- 事前対応型の修学指導支援システムの開発 室蘭工業大学大学院 佐藤和彦・小笠原和輝・永野宏治

B会場において発表された論文は、

- 地域づくりのコンテンツ制作・提案の授業実践 - マルチメディアの活用力に格差がある学生群の効率的な協働学習 - 立命館大学 笹谷康之 / 近江八幡市マルチメディアセンター 藤田知丈

● eポートフォリオにおけるグループワークの活用効果
青山学院大学総合研究所 新目真紀・半田純子・合田美子・長沼将一

● 情報科の授業実践および「学習支援 Web サイト」の作成と活用

早稲田大学高等学院 金田千恵子・橋孝博・嶋田ひとみ

● 高等教育における情報系のビジネス資格取得の目的 - 問題点とキャリア教育による補完 -
北陸学院大学短期大学部 辰島裕美

● 学習サイクルに基づく栄養教育技術習得の試み
鈴鹿短期大学 田中雅章 / 仙台白百合女子大学 神田あづさ



● Web 作成技術に関する基礎知識の測定 - 「表現の基礎」の理解に向けて -
大阪国際大学 中野健秀・森友令子・矢島彰

● 携帯電話の利用方法に関する情報モラル授業プログラムの開発

千葉大学大学院 阿部学 / 千葉大学 藤川大祐 / 静岡大学 塩田真吾 / 富里市教育委員会 古谷成司 / NPO 法人企業教育研究会 市野敬介 / ソフトバンクモバイル(株) 梅原みどり

● 「デジタル青森」を活用した高校生セミナー - 情報技術の魅力を喚起する試み -
青森大学 石田努・小久保温・坂井雄介・角田均・メネンデスフランシスコ・和島茂・上谷疆輔

● 電子工作実践を導入した情報関連学習が学習者へ与える心理的パフォーマンス
北海道教育大学札幌校 杵淵信 / 上越教育大学 川崎直哉 / 椋山女学園大学 鳥居隆司

● 現代版パーソナルコンピュータ態度尺度作成の試み
東北大学大学院 落合純・石渡陽子・彭志春・和田裕一

研究会に参加された方からは、発表時間が短いにも関わらず、貴重なご意見をいただくことができ、今後の研究会に示唆を得ることができたという意見や最新の研究をいろいろ聞くことができ、有意義な研究会であったなどの意見がほとんどであった。しかし、本研究会開催の声明には一理あるが、交通事情が制限され、参加への不安要素が多い中での開催に疑問や不審を感じたとの意見もいただいた。このような率直な意見がいただけることは非常に有益なことであり、ありがたいと思う。今回の研究会では、いろいろな意味で、会員の皆様に、様々なご迷惑をおかけしたことをお詫びするとともに、今後の検討課題として考えていきたい。

文責：鳥居隆司（椋山女学園大学）

【CIEC 第 90 回研究会報告】

テーマ：震災と情報モラル

(震災を経験して私たちは何を学んだか)

日時：2011年5月29日(日)

会場：札幌学院大学 C館4階

参加者：34名

はじめに小中高部会の福島先生より、この研究会の開催趣旨の説明があった。この研究会は、3.11の震災を受けて、「メディアリテラシーとは何であったのか」を問い直すために企画された。具体的には、次にあげる4つの課題からこの研究会で考える、1つ目として、インフォーマルな情報の信頼性が高まったことがあることなどから、「情報の確からしさとは何か」、2つ目としてチェーンメールや初等中等教育では良く評価されていないソーシャルメディアの重要性が明らかになり、「情報モラルで『悪』といわれていたものが、震災では影響を持っていた」こと、3つ目として、「この震災を通じて私たちは本当に子供たちを見てきたのか」ということ、4つ目として、「私たちが今まで情報教育の中で教えてきたことを正しかったのか」という、今までの教育内容を問い直す視点である、とした。



これらの課題を受け、千葉大学教育学部の藤川大祐教授に「震災とメディアの活用～リテラシーと情報支援を中心に～」というテーマで講演をいただいた。藤川氏は、震災前に自分でやってきたこととして、大学生だけではなく、高校生にも「ディベート甲子園」などを通して、メディアを積極的に使うことを訴えかけてきた。その後、3.11の震災を受け、3月13日には、自身のブログで全国の小中高等学校の先生方に向けて、「地震の後、学校で考えてほしいこと」として、「この震災が何もなかったように振る舞うのではなく、あったことを語り合う大切さ」を伝えてきた。またこの間の他の先生や子供たちの発信した内容やテレビの報道メディアの問題点などについても説明を受けた。さらに自分の大学の学生が行っている「SAVE TAMURA」の活動を通して、学生や被災者の望んでいることやその対応を通しての変化などについても語っていただいた。この震災を通じて、被災に関する「情報支援」という観点が必要であり、メディアに関する教育についての再構築が必要である。常に前を向いて対応していこうとする態度やメディアを積極的に活用しより良い状況を作っていくことが重要であると説明された。



実践報告では、阪神淡路大震災の際に実際に被災の経験を持つ神戸国際大学附属高等学校の大木先生より、その頃の情報インフラのみ整備の状況や「こころのケア」などが十分に行われていなかったことなどの反省を元に教員がこの震災をどのように扱うかが重要であることが語られた。またこのような非常時にこそ教師のリーダーシップも発揮されており、教師に問われている能力を考え直す必要があると語った。ま

【CIEC 第 91 回研究会報告】

テーマ：これからの電子黒板利用のあり方

日 時：2011 年 7 月 18 日(月) 13:00～16:30

会 場：大学生協杉並会館 2F 会議室

参加者：28 名

た千葉県立袖ヶ浦高等学校の永野先生からは、震災時に爆発火災事故のあった千葉縣市原市の石油コンビナートに関するデマメールについて、また固定電話が通じない場合の連絡、公式な情報を探す難しさ、非公式な情報の選別についての問題点などについて語られた。さらにこの会には欠席だったが、福島県の小野浩二先生からは美術雑誌「美育文化」に寄せた今回の震災に関する記事について資料提供があり、札幌旭ヶ丘高等学校の高瀬先生より詳細な説明と Facebook における小野先生の報告などについての紹介があった。

討論では、CIEC の海外視察に言ったメンバーからは、米国でのこの震災に関する報道の状況が語られた。また北海道の学生さんなどからは地震の影響の少なかった北海道での受けとめ方などについても語られた。神戸の大木先生からは、阪神大震災の際に、このような大きなことが起こっても、その地域以外の方からは実感を持たれなかったことに当時は不快感を持ったが、今回の震災では共感を感じたとの感想があった。北海道文教大学の曾我先生からは、「私たちは情報に何を求めているのか。」との問いかけがあり、この震災を情報を改めるよききっかけにしなければならないという意見が出された。酪農学園大学の森先生からは、今の若者は一部のメディアに頼っている。いま必要な力は、コンピュータを使えることではなく、いかに生きていくのかを考えるための情報活用能力であるとの意見が出されました。その他にもたくさんの意見が出されましたが、最後に藤川先生からまとめとして、報道は必要であるが、その多くは東京を中心に作られており、それらの情報を批判的な思考で、判断する必要があること、情報を流さないのではなく、ネットを使ってどれだけ影響力のある発信が行えるかが重要であり、それを考えることが必要であると、締めくくった。

文責：大橋真也（千葉県立船橋啓明高等学校）

政府によるスクールニューディール構想によって、電子黒板が全国の小中学校に配備され、インフラ面での学校の ICT 環境は整いつつある。「教育の情報化」は、学校の授業環境の側面で、着実に進行していると考えられるが、その使い方がわからないなどといった現場での不安があるのも事実である。このような不安に対しては、電子黒板の実践事例紹介が有効であると考えのもとに企画された。

電子黒板を単に「このように使ってみた」という実践事例の発表の場とするのではなく、「この授業を行ったことで、これまでの授業と何が変化したのか」、「子どもたちにとってどのような効果をもたらすのか」などについて、初等中等教育現場としての立場から検討した。また、国外の活用事例報告や従来とは異なった新たなデジタル教材の活用スタイル、電子黒板の利用方法などについてもアイデアを出し合い、これからの初等中等教育の ICT 活用について、議論を深めた。

なお本研究会では、株式会社アスタリスクの協力により、87inch という大画面の電子黒板（英国プロメシアン社製 Interactive Whiteboard）を使用した。



冒頭、小中高部会世話人の永野直氏（千葉県立袖ヶ浦高等学校教諭）より開催趣旨の説明があった。

電子黒板は未だごく一部のエキスパートの先生が使う特別な教具というイメージが根強いが、全ての先生方が日常的な教具として使うために参考となる模擬授業や事例紹介を通じて議論を深め、PC カンファレンスのセミナー 4 「電子黒板・デジタル教材と学びの進化」での議論へ繋げたい。

電子黒板を活用した模擬授業

電子黒板モデル校の活用事例 「道徳の問題どう解く？」

増坪広夫氏（山梨県甲斐市立双葉東小学校 教諭）

電子黒板を活用し、自然を愛する心を育てる道徳「一ふみ十年」

※資料名「一ふみ十年」（出典：「希望を持って」5 年東京書籍）

導入部では小学生に対してはつかみが大切で、電子黒板に写真を表示し、「ここはどこでしょう？」と発問する。その際、一度にすべてを見せてしまうのではなく、一部分から全体を想像させることが重要。機器の操作が苦手だと言う先生もいるが、紙芝居的に使えることを強調することで、手軽に使えると感じてもらえることができる。



実際に副読本を範読し、活用シーンごとに説明が行われた。

写真を見せることにより自然とおしゃべりが止む。道徳が

生活指導になってはいけない。子供達自身に考えさせ、発言させることが重要。では、発言を何処に書くかが問題となる。普通の授業では50インチの電子黒板を使用しているため、電子黒板は教材を提示したり説明したりするツールとして使い、子供達の発言は黒板に書くというように役割を切り分けて使っている。



情報は小出しにすることが興味を持続させるためには重要。生徒へ副読本を渡してしまうと先に読んでしまうので、実際の授業では副読本は渡していない。

画像を見せてペン機能の使用事例を実演。写真を取り込むだけで状況の理解が深まることを指摘。対象クラスの児童の実態に合わせて教材を用意することが大切。例えば実物（今回の教材ではマッチ棒）に触れさせることで実感し気付くことも多い。

「どんな気持ちでしたか」という発問がこの授業の核。教師が答えを用意するのではなく子供達に発言させることが最も重要。

道徳の授業では、最期に教師の訓話で終わることが多い。または、先生の経験談、生徒に感想を言わせる等というパターンもある。

最期にBGM入りのスライドを見せることが多かったとして、テロップを入れたものを教師の価値観を押し付けた失敗例として紹介。道徳は児童自身の気づきが重要なので教師の読み取りを生徒に押し付けてはいけない。感じ方、受け止め方はそれぞれでよい。「明日から～しようね」だと指導になってしまう。

感じたことは実践することができる。教材で取り扱われている物語は切っ掛けに過ぎない。国語の授業ではないので、物語を振り返る必要は無い。

これからのことだけについて考えさせることが大切。富士山、八ヶ岳、コスモス、菜の花と桜等の写真を見せて感想を書かせて終わる。教師は何も語らず、オープンエンドで。道徳で大切なことは、教師がしゃべりすぎないこと。見せるだけという場面では正に電子黒板がうってつけである。国語の読み取り教材ではないので、教師の価値観を押し付けない。不易（道徳）時代を超えて変わらない価値のあるものと、流行（電子黒板）時代の変化と共に変えて行く必要があるものがある。



HPに具体的な実践報告を公開しているのを参照されたい。

「甲斐市立双葉東小学校 電子黒板活用に関わるページ」
URL http://www.city-kai.ed.jp/fhsho/?page_id=496

事例報告 1

「電子黒板活用環境づくり～行政及び学校経営の立場から～」

奥山賢一氏（山梨県北杜市立高根北小学校 校長）

行政（甲斐市教育委員会の学校教育課）に出向していた立場からのお話。甲斐市における電



子黒板等の整備状況の説明。当初天吊り式で検討していたが、本体より工事代金の方が高くなることがわかり可動式になった。現在の勤務地である北杜（ほくと）市や北海道ではほとんど予算を活かせなかった。電子黒板の整備状況では、大阪府が最高で最低は長崎県。予算獲得には市町村基本計画への位置付けが必要。担当者を一人にしないで必ず複数配置し異動に対応できるようにすることも重要。

電子黒板が無くても地デジテレビで替わりができる。活用型授業ではOHC（書画カメラ）と地デジテレビの組み合わせが効果的。生徒がノートに書いたものを直接提示することができる。地デジも校内LANもない学校でネットデイを実施し4万円ほどの予算で校内LAN配線の敷設工事をボランティアで行った。教師のチームワークを醸成し、継続した取り組みにすることが鍵である。環境が整っていない学校でも、ネット上のコンテンツを各教室で活用できる環境づくりが求められている。被災地の学校との交流に向けて「ヒューマンネットワークの教育版」が実現できたらと思う。



事例報告 2

海外での実践事例報告

坂野勝美氏（株式会社アスタリスク）

英国のプロメシアン社とインタラクティブ・ホワイトボードについての紹介。

プロメシアンが一番力を入れているのは情報の共有であり、「プロメシアン・プラネット」というコミュニティサイトを運営している。現在全世界に約100万人の会員がいる。アクティブクラスルーム、アジア各国での活動事例を紹介。実践事例をいかに多く作って行くのが重要だと考えている。評価結果は全て「プロメシアン・プラネット」で公開している。



その後、2週間前に導入された台湾の学校での授業の様子のビデオが上映された。子供達に参加させて理解度を深めさせる工夫や、音や動きがあることで子供達は集中することや答えを間違った場合でもコンテンツの反応を楽しんでいる様子がわかる。決して特別なことをやっているのでは無い。自然に活用している。従来授業でやってきたことを、IWBを使うとよりうまくやれるのではないかと考える。生徒はテキストを見るのではなく先生との対話を楽しんでいる様子が伝わる。

ディスカッション・意見交換

最後にディスカッション・意見交換が、永野直氏（千葉県立袖ヶ浦高等学校教諭）の進行で行われた。

一つ目の論点は、電子黒板をエキスパート以外の先生が日常的な教具として使うための方策について。

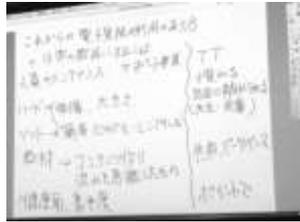
以下、発言の一部を簡条書きで示す。

・些細なトラブルが発生した際の迅速なサポートがなければ使われなくなってしまう。LLもCALLシステムも同様だ。教員以外に一人でもサポート要員が常駐していることが重



要。

- ・基本的に教員以外のサポート要員がないことが問題。
- ・ITで代替可能か？TAは活用できないか？
- ・慣れることが重要。わからないことが出てきたときにすぐ聞くことができる環境づくりが大切。トラブルで一番多かったのが、ケーブルの接続の誤りで音が出ないということが多かった。
- ・いつでも触れられる環境にあることが重要。使えない場所にしまっただけでは使われない。自由に触れる環境作りが重要。
- ・黒板と同じように使えなければ、誰もが使えるようにはならない。最近の電子黒板はレスポンスが良くなった。スイッチを入れるだけですぐ使えるようになれば、誰でも使えるようになるのでは。
- ・プロジェクタと違って電子黒板は一体型が多く、準備が簡単なものが多い。ソフトウェアも多機能になって使いこなすのが難しい。実際には書くか消すか画像を提示するか位しか使わない。シンプルな機能が重要では。
- ・授業だけでなく、日常の会議等でも使うようにならないと身近なツールにならない。
- ・ホワイトボードを使いたがらない先生がいるように、どんなに使い勝手が黒板と同じになったとしても電子黒板を使わない人はいるだろう。
- ・電子黒板を使うことによって授業力の違いが明確になるのを嫌う教師が多いのでは。
- ・コンテンツを見せれば見せるほどひいて行く教師が多い。
- ・コンテンツは自分で作らなくても入手可能。
- ・大容量のストレージが安価になったためコンテンツの共有化も比較的簡単にできる環境になってきた。
- ・パワーポイントのスライドはノートを取りづらい。電子黒板も同様な問題があるのでは。
- ・スライドに手書きする部分を残しておく工夫をしている。
- ・学校種によって電子黒板のどの機能を使うかが違うのではない。
- ・小学校では板書の美しさも要求される。
- ・50インチの大きさでは教材提示にしか使えない。
- ・小中では子供の集中度を高めたいときのみに使うことが重要。
- ・小中高では人員の問題の解決することは難しい。校内的に解決することが必要。
- ・PC同様、光を見続けることになるので目が疲れる。



二つ目の論点は、実際にどの場面で、どういう目的でどの様な使い方ができるのかということを整理していきたい。

以下、発言の一部を箇条書きで示す。

- ・授業のやり方として、教師主体（一斉授業）、生徒主体（自分達で学び共有する）、教師が教材の提示で使用、生徒が先生のコンテンツを使用、生徒がコンテンツを作ったり、授業を行うなどの活用形態がある。
- ・現状では教材提示的な使用場面が多いのでは。それではプロジェクタと用途は変わらないのでは。
- ・IWBの活用段階として、提示、モデル・概念提示、知識の共有、先



生のガイドに基づいて生徒が活用、生徒自身の主体的な学びの5つが考えられる。

- ・日本では電子黒板と呼んでいるが、国際的にはIWB (Interactive Whiteboard) が一般的。
- ・児童生徒一人一人がiPadのような端末を持つようになったら電子黒板の使い方が変わるのでは。
- ・ネットワークを使ってインタラクティブに教育活動を行うには、校外とも自由に通信できなければ障害となる。
- ・現状では校内LANの通信速度がボトルネックになっていることもあるのでは。
- ・多くの学校に整備された機器は50インチのものがほとんどである。サイズの限界があるため、電子情報ボード的な使い方から始めるのがベターでは。
- ・体育での実践例として、跳び箱運動での活用事例がある。Webカメラで撮影するとコマ取りのように表示できるため、その場で表示して児童間でアドバイスを生かすことができたなど、リアルタイムのフィードバックが可能である。子供同士のコミュニケーションで学び合いが促進された事例。電子黒板ならではの使い方。
- ・双葉東小学校では外部とのコミュニケーション（大学の先生とのやり取り）から始まったのが良かったのではないか。
- ・電子黒板を使ったプレゼンテーションは、よりインタラクティブ性が求められるため高度化するのでは。
- ・国際的には電子黒板ではなく「IWB (Interactive Whiteboard)」と呼ぶことが多い。「電子黒板」ではなく「電子情報ボード」の方が良かったのでは。



現在、多くの初等中等教育の教室では、50インチのプラズマディスプレイをベースとした電子黒板が使用されている。サイズとしては黒板というより大型のディスプレイに過ぎない。40人の生徒全員へ見せるには小さ過ぎる。また、黒板のように生徒の発言等を書き込んで常時見せるような活用場面では使えない。本研究会では、87インチという大型の電子黒板を使用して行われたため、まさに黒板代わりに活用することが可能であった。会議室が未来の教室のような環境となり、参加者がその環境を体感できたのがとても有益であった。また、企業の方の参加が多かったのも特徴的だった。

最後に、事前の準備および当日の機材搬入設置から搬出まで奔走して下さいました株式会社アスタリスクの皆様へ感謝したい。

文責：高瀬敏樹（北海道札幌旭丘高等学校）

CIEC からのお知らせ

【CIEC 第 92 回研究会開催案内】

テーマ：社会へつなげる学び
～問い直そうキャリア教育～

日 時：2011 年 10 月 16 日（日）13：30 ～ 16：30
会 場：京都女子中学校・高等学校

◎開催趣旨

2011 年 1 月の中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」等には、キャリア教育は生涯学習社会の構築を目指し、幼児期の教育から高等教育まで体系的な推進の必要性があると述べられている。キャリア教育の根幹に職業生活を含めた一人一人の幸福な人生設計の重要性があることは、すでに多くの教育者にとって周知のことである。またキャリア教育とは、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」としており、特定の時間や活動・教科・指導方法で実施するものではなく、さまざまな教育活動を通して実践されるものであるとしている。しかし、現実にはキャリア教育に関する教科書がないため、必要性は十分に意識しているものの、その目的や趣旨を誤解されたまま実践されていることも多い。

キャリア教育において考えると、初等中等教育では高校卒業後のキャリア形成を実現する準備段階と位置づけられており、また高等教育では社会的・職業的自立が目前に迫る時期であり、その内容も広く多岐に渡っている。今回の研究会では、学習論の若手研究者に教育と職場の接続性や、また教育で得られた能力や知識を活用する事例について紹介していただき、参加者がそれぞれの立場や教育活動の中で可能な、キャリア教育について、カリキュラムや生徒に対する工夫などについて、提案し、意見交換する。

この研究会を通して、小中高大さまざまな学校における、各教科・講義担当者のそれぞれの視点から、キャリア教育についてその実践を通して、問い直すことができることを期待する。

◎プログラム

13:30 開催挨拶
13:40-14:40 講演 1
『学習論の変遷と状況論・活動理論からみた看護教育：越境的な学びへ』
講師 香川 秀太氏
(大正大学人間学部教育人間学科 専任講師)
14:50-15:50 講演 2
『教育と活用との間の障壁に潜むもの：研修効果測定モデルの構築を事例に』
講師 伊達 洋駆氏
(有限責任事業組合ビジネスリサーチラボ 共同代表神戸大学大学院経営学研究科 博士課程)
16:00-16:30 『ディスカッション』
「各学校での体験活動を、どのように次のステージや職場と接続できるか」
16:30 閉会

【外国語教育研究部会第 5 回学習会】

テーマ：タブレット PC 時代の外国語教育

日 時 2011 年 10 月 22 日（土）13:00 - 16:00
会 場 大学生協会館地下会議室

◎開催趣旨

Apple 社の iPhone に代表されるスマートフォンでは数多くの教育用アプリが開発され、モバイル・ラーニング環境が本格化し始めたが、電子教材を扱うには画面が小さすぎるのが難点である。一方、タブレット PC は e-ラーニングの利点とモバイル・ラーニングの利点を併せ持ち、画面が格段に見やすく、入力しやすい。個人・企業双方のレベルで急速に利用が本格化しつつあり、今後、教育現場でもタブレット PC を用いた教材開発が進むことが予想される。そうした現状を踏まえ、タブレット PC 時代の外国語学習に有用なリソース紹介や活用方法を共有するための機会を提供する。

◎プログラム

13:00 開会の辞
13:10-13:40 講演 1
『IT 技術と外国語教育』
講師 金義鎮氏（東北学院大学）
13:40-14:10 講演 2
『タブレット PC による外国語ビデオ・コミュニケーションの可能性』
講師 小出泰久氏（日本アバイア株式会社）
14:10-14:40 メーカー展示・デモ
・日本アバイア株式会社
・インフォテリア株式会社
・アップルジャパン株式会社
14:40-15:10 講演 3
『iPad で使える外国語のための電子教科書 (PDF・EPUB) を自作する』
講師 清原文代氏（大阪府立大学）
15:10-15:40 事例報告
『iPad のアプリケーションを利用した多角的英語教育の試み』
報告 鄭京淑氏 他 7 名（大阪教育大学大学院）
15:40-16:00 質疑応答・自由討論

❖❖研究会への参加について❖❖

研究会には会員・非会員を問わずどなたでもご参加いただけます。

◎参加費：CIEC 会員は無料その他の方は 500 円

◎お申し込み・お問い合わせ

CIEC 事務局
e-mail : sanka@ciec.or.jp
TEL:03-5307-1195 FAX:03-5307-1180

【PCカンファレンス北海道2011開催案内】

テーマ：新しい教育のデザイン
～北海道での実践例から～

日時：2011年11月5日(土) 6日(日) 13:30～16:30
会場：札幌国際大学
(札幌市清田区清田4条1丁目4番1号)

分科会論文のご応募をお待ちしております。
※詳細は下記サイトからご覧いただけます。
<http://www.hokkaido.seikyou.ne.jp/pcch/2011/>

【CIEC 春季研究会 2012 論文募集のお知らせ】

詳細は <http://www.ciec.or.jp/> をご覧ください。

論文投稿期間は、
11月1日(火)～12月1日(木)です。

CIEC 活動日誌

- | | |
|--------|--|
| 2011.2 | 22 火 小中高部会ネット世話人会
29 土 2010年度 CIEC 第2回三役会議 |
| 2011.3 | 6 日 三役会議(早稲田大学)
12 土～17 木 Duke 大学訪問
20 日 2010年度 CIEC 第2回三役会議
20 日 2011PCC 第2回プログラム委員会(熊本大学)
26 日 春季研究会 2011
27 日 CIEC51 回会誌編集委員会
小中高部会世話人会 |
| 2011.4 | 14 日 CIEC 生協職員部会世話人会
16 日 CIEC 北海道支部 presents 学校の玉手箱
Vol. 11
17 日 2011PCC 時間割編成会議
23 日 CIEC 北海道支部 presents 学校の玉手箱
Vol. 12 |
| 2011.5 | 15 日 三役会議
21 日 北海道支部第1回世話人会
28 日 小中高部会世話人会
29 日 CIEC 第90回研究会(札幌学院大学) |
| 2011.6 | 9 日 PCC 北海道 2011 準備会
12 日 2010年度 第3回運営委員会
26 日 2011PCC 第3回プログラム委員会(熊本大学) |
| 2011.7 | 2 日 PCC 北海道 2011 第1回実行委員会
14 日 CIEC 生協職員部会世話人会
18 日 CIEC 第91回研究会(杉並会館)
28 日 PCC 北海道 2011 第2回実行委員会 |
| 2011.8 | 5 日 2011PCC 実行委員会
第2回 CIEC 理事会
小中高部会世話人会
6 日 2011PC カンファレンス(8/6～8/8)
CIEC 第52回会誌編集委員会
CIEC 研究委員会
7 日 CIEC 定例総会
31 日 オーストラリア視察(8/31～9/6) |